

オスティアの敷居からみる戸締りについて

～ホレアの敷居を手がかりとして～

宮越潤希

1. はじめに

1-1. 研究の背景と目的

古代ローマにおいて、敷居は現代と同様に建築物の要素の一つであり、その痕跡から扉の形状や施錠の有無など、その設計について多くの情報を得ることができる。ラウリツェンは「ポンペイとヘルクラネウムの扉プロジェクト」^{注1)}において行われた敷居と戸袋の調査に関する概要を紹介しており^{注2)}、堀はポンペイにおける社会構造と住宅平面の関連性を敷居の形態分析による空間構成の解釈により考察している^{注3)}。いずれの論文においてもポンペイやヘルクラネウムの敷居を扱っているが、オスティア遺跡内において、これらの論文で扱われていない2種類の敷居の存在が確認でき、そのうち1つはホレアと呼ばれる倉庫型の建物^{注4)}および住宅の玄関、特に街路から直接2階へつながる階段に集中している。本稿では、そうしたオスティアに特有の敷居の分布と形状から、当時の建造物の戸締りについて考察する。また、ホレアの開口に残された痕跡をもとに、施錠の機構を含めた扉の復元を行う。

1-2. 研究方法

オスティア遺跡における敷居の分布を調べるために、街路に面した開口、住宅内部の開口、ホレアの開口をそれぞれ調査した。それぞれの調査方法として、まず街路に面した開口に関しては、オスティア遺跡で行った踏査により、立ち入り可能なすべての街路沿いの開口の敷居の形状を分類して図2に示すプロット図を作成した。調査した開口のうち、半数以上は草に覆われていたり、土に埋もれていたり、表面が大きく削れていたりして敷居の形状を読み取ることができない状態であったため、今回はそれらを除き、形状を確認できた敷居のみを研究対象とした。次に住宅内部の開口に関しては、過去の実測データ^{注5)}を使用し保存状態のよい10点の住宅^{注6)}の平面図を確認することによって敷居を調査した。最後にホレアの開口に関しては、G. リックマン著の ROMAN GRANARIES AND STORE BUILDINGS ^{注7)}からの情報と過去の実測データから開口の写真を確認し、敷居を分類した。またその際、ホレアの開口に残された施錠の痕跡についても同時に調

査を行った。

そして、これらの情報をもとに敷居および開口の形状について考察したうえで扉の復元図を作成した。

2. 敷居の分布

2-1. 街路に面した開口

踏査の結果、オスティアには大きく分けて5つのタイプの敷居が確認された。図1に示すように、それぞれ3方向に戸当たりがあるものをaタイプ、2方向に戸当たりがあるものをbタイプ、1方向に戸当たりがあるものをcタイプ、溝を持つものをdタイプ、表面に凹凸を持たないものをeタイプとした。それぞれの数は図1に示す通りである。c, d, eタイプに関してはポンペイやヘルクラネウムでも確認された敷居のタイプであるため本稿ではいったん脇に置き、オスティアに特徴的なタイプのうち数の多いaタイプの敷居に研究対象を限定する。aタイプの敷居に関しては、ほかのタイプの敷居と比べて多く使用されているとはいえ、都市全体のなかでの偏りも見られなかったが、住宅、特に街路から直接2階につながる階段の開口に多く見られた。2階へつながる開口の中で敷居の形状を確認できたものは67箇所あり、そのうちaタイプは39箇所を確認された。

2-2. 住宅内部の開口

住宅内部の開口に関しては、過去の実測データから10点の住



写真1. 街路に面した階段の例

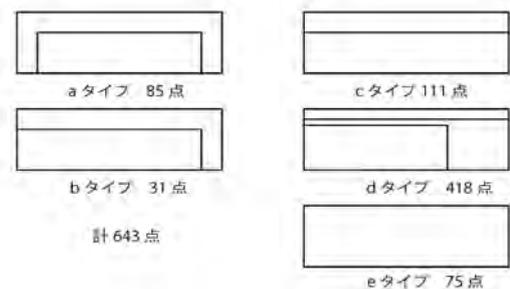


図1. 敷居の分類方法

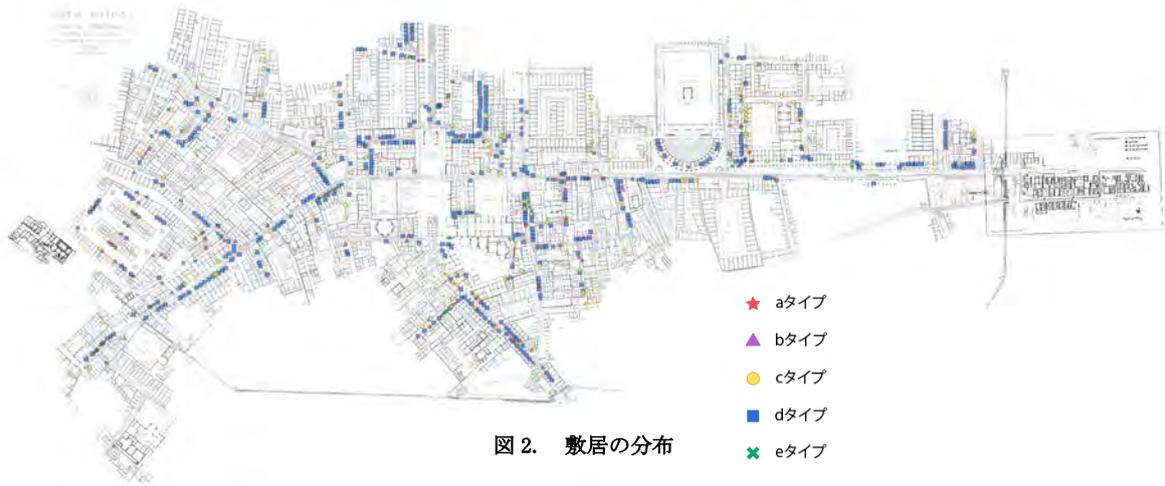


図2. 敷居の分布

宅について平面図を確認した。3つの住宅（ミューズの家、黄色い壁の家、巫女の家）に関しては、住宅内部の開口の床面には敷居ではなくモザイクが施されているものがほとんどであった。扉を設置するための軸穴も確認されないが、モザイクの装飾の上から扉枠を固定することは考えにくいから、これらの開口には扉が存在しなかった可能性が高い。また、そのほかの7つの住宅（キューピッドとプシュケの家、アニウスの家、井戸の家、絵画の家、木星とガニメデの家、ニンフェウムの家、塗装天井の家）では、モザイクも敷居も確認できない開口がほとんどであり、敷居が設置されている例もあったが、それらの石の表面には凹凸がなく、軸穴も確認されなかった。これらのことから、オスティアでは住宅の内部で扉を取り付けるための敷居が用いられることは一般的ではなかったと考えられる。



写真2. ミューズの家内部の開口

2-3. ホレアの開口

G. リックマンはオスティア遺跡における 11 箇所（11）のホレアについて詳しく記述している。彼の記述によると、ホレアの敷居にはマージナルチェック (marginal check) と呼ばれる戸当たりと扉を取り付けるための軸穴が確認されている。また、HORREA (IV, V, 12) で示されていた敷居の図（図3）は、2章1節で示した街路に面する敷居から得られた分類の a タイプと形状が一致し

ている。

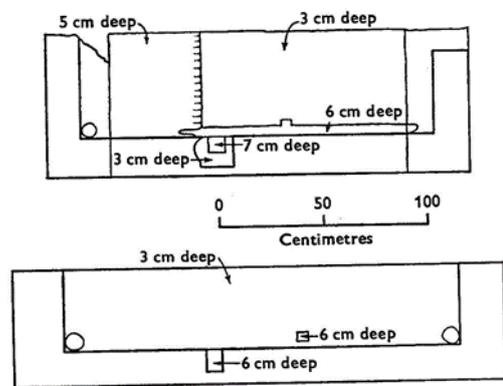


図3. リックマンによる敷居の図

実測データでは、8 箇所のホレアについてすべての開口を写真で確認し、敷居の形状を分類した（図4）。HORREA DI HORTENSIVS および HORREA (III, XVII, 1) に関しては荒廃が進んでいたため敷居の形状を確認することができなかったが、残りの6つのホレアのうち HORREA (I, VIII, 2) を除く5つのホレアでは、確認されたほとんどの敷居が a タイプであった（表1）。a タイプの敷居はホレアの室の開口で使用され、正面玄関の開口では使用されない傾向にあった。HORREA (I, VIII, 2) では、24 箇所の開口のうち11箇所で敷居を確認できたがそのうち7箇所の敷居は c タイプであることが確認でき、今回調査したホレアの中で唯一 a タイプ以外の敷居が一番多く確認された。HORREA EPAGATHIANA については、25 箇所の開口のうち21箇所で敷居を確認でき、部屋へと通じる開口のほとんどに鉄の柵が設置されていたため敷居のタイプを確認することはできなかったが、手前側に戸当たりがあることは確認できた。また、HORREA (I, XIII, 1) では、正面玄関を除くすべての開口に敷居が確認されたが、実際の数よりも多くの敷居が通路に落ちているこ

ホレア名称	開口	敷居	判別不明の敷居	aタイプの敷居	bタイプの敷居	cタイプの敷居	dタイプの敷居	eタイプの敷居
GRANDI HORREA	78	19	1	16	1	1	0	0
HORREA EPAGATHIANA	25	21	18	2	0	1	0	0
HORREA(I,VIII,2)	24	11	4	0	0	7	0	0
Piccolo Mercato	35	20	2	18	0	0	0	0
HORREA DI HORTENSIVS	36	4	4	0	0	0	0	0
HORREA(III,XVII,1)	14	2	1	1	0	0	0	0
HORREA(I,XIII,1)	12	15	0	15	0	0	0	0
HORREA(III,II,6)	2	2	2	0	0	0	0	0

図4 各ホレアの敷居分布

とが確認された。このホレアに2階につながる階段は見られなかったことから2階の開口でこれらの敷居が使用されていた可能性も低いいため、これらはまぐさの一部として利用されたことが考えられる。

3. 施錠の痕跡

3-1. リックマンによる施錠の痕跡の分析

aタイプの敷居の使用方法を考察するうえで施錠の機構についても分析を行った。リックマンは、HORREA EPAGATHIANA および HORREA(III, II, 6)に関する記述のなかで、開口で確認された施錠の痕跡についても論じている。図5はHORREA EPAGATHIANAの正面玄関内側の開口に残っている施錠の痕跡である。施錠の痕跡は敷居の軸穴の1.3-1.5メートル上方に設置されたトラバーチンのブロックに残っており、一方のブロックには単純な四角い穴が開き、もう一方のブロックには角穴の中にさらに複雑な四角い穴が開いている。複雑な方の角穴には溝が走っておりその中にさらに小さな溝があることから、木の棒を片方の穴にはめた後、溝に沿って反対側の穴の中にスライドさせ南京錠で固定したと考えられており、その際木の棒はドアに取り付けられたL字型の金属性支持具に落とし込まれたとされている。

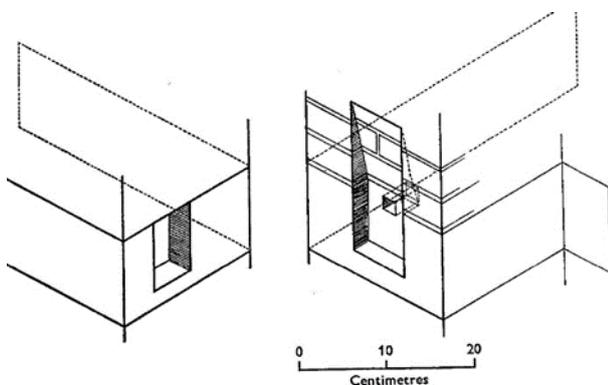


図5. リックマンによる施錠痕跡の図

3-2. 実測データによる施錠の痕跡の分析

実測データを用いて8つのホレアを確認したところ、HORREA EPAGATHIANA と HORREA(III, II, 6)の開口で施錠の痕跡が確認でき、リックマンの記述と一致した。

施錠の痕跡の位置を考えると、これらの開口には外鍵がかけられていた可能性が高い。HORREA EPAGATHIANA では21箇所の開口で敷居が確認されているが、それらのすべての開口において施錠の痕跡が確認された。HORREA (I, XIII, 1)に関しては、街路に面した2つの開口を調査した。施錠の痕跡が確認された開口に共通する特徴として、側面の壁が敷居の形状に合わせて出っ張った形状（以下、これを顎とよぶ）になっていることがあげられる（図6）。顎の部分に施錠の痕跡が残っており、扉の軸を囲むような形状となっているが、ほかのホレアでは同じ特徴は見られず、顎のない壁が用いられている。

4. 形状についての考察および扉の復元

オスティア遺跡のホレアで見られたaタイプの敷居の特徴として、3方向に戸当たりがみられることがあげられるが、その形状のためにド

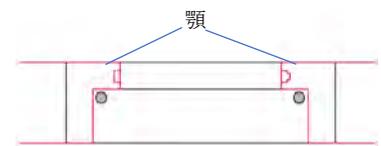


図6. 2つのホレアで見られた壁の顎模式図



写真3. HORREA EPAGATHIANA

正面玄関の開口



写真4. HORREA EPAGATHIANA

室の開口

アの軸と壁との間に隙間が存在する。3章で挙げた2つのホレアに関しては顎によりその隙間が埋められているが、そのほかのホレアでは隙間を埋めるものが確認されない開口がほとんどである。これらの隙間を空洞のまま扉を取り付けていたとは考えにくく、おそらく木製の扉枠をはめていたことが予想される。

これらの考察から、ホレアにおけるaタイプの敷居の上に取り付けられていた扉の復元図を作成した。扉枠の形状は、3章であげた2つのホレアで見られた壁の形状と同じく、扉の軸を守るような形状とした。また、扉には施錠の機構も設けられていると考えられる。施錠の機構に関してはリックマンの考察を参考にし、木の棒をかけ渡し、金属製の支持具に落とし込むものとした^{注8)}。

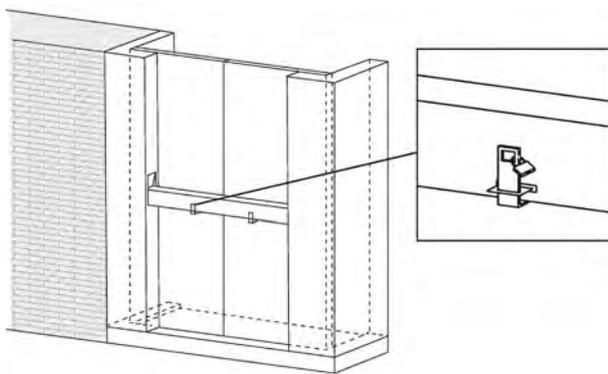


図7. 扉の復元図

aタイプの敷居には木製の枠が乗っていたと考察したが、ほかのタイプでも扉枠を設けることは可能である。縁を設けた理由としては、軸穴を前面からだけでなく側面からも守ることでより扉を破壊されにくくするという目的、または扉枠を地面に触れさせないことで、扉枠の耐久性を上げるという目的が考えられる。どちらの理由にしても、扉の防犯性を上げようとする意図が読み取れる。

ホレアにおいては外鍵をかけるための施錠機構が確認されたが、ホレアという建物の性質上、中に人がいる状態で鍵をかけることがないことを考えれば妥当である。また、住宅にaタイプの敷居が用いられていた理由については明らかになっていないが、ホレアと同じく外鍵がかけられていたとすれば、住んでいた人々が外出し家を留守にすることが日常的に起こっていた可能性が考えられる。

5. 結

aタイプの敷居は主にホレアで使用され、それらの敷居を持つ扉には外鍵がかかっていたことが想定され

た。ホレアではaタイプの敷居が防犯の目的で使用されたと考えられる。また、ホレアの開口における調査、考察をもとに扉の復元図を作成したが、壁の顎が確認されず、かつaタイプの敷居が確認されたホレアにおける開口を復元したものであるため、非常に限定的であるといえる。今後の展望としてホレア以外でのaタイプの敷居の用途に関してさらなる考察を進め、また、その考察をもとに扉の復元も行っていきたい。

注釈

注1)「ポンペイとヘルクラネウムの扉」では(1)ポンペイとヘルクラネウムのサンプル家屋における扉と仕切りの位置、サイズ、スタイルを復元すること、(2)敷居と戸袋のデザインの類型を確立すること、(3)境界の位置を確立した上で個々の構造における家庭空間の使い方を再認識することを目標とし、ポンペイ遺跡及びヘルクラネウム遺跡のアトリウム型住居32棟の敷居と戸袋の調査を行っている。

注2)参考文献2)

注3)参考文献4)

注4) ホレアとは何かを保管する建物を意味するラテン語でありオスティア遺跡では中庭を持った倉庫型の建物がいくつか確認されている。

注5) 堀賀貴研究室実測データのパンorama写真を使用。

注6) 調査を行った住宅はキューピッドとプシュケの家(I, IIV, 5)、アニウスの家(III, XIV, 4)、井戸の家(V, II, 13)、絵画の家(I, IV, 4)、木星とガニメデの家(I, IV, 2)、巫女の家(III, IX, 6)、ニンフェウムの家(III, VI, 1-3)、黄色い壁の家(III, IX, 12)、塗装天井の家(II, VI, 5-6)である。

注7) 参考文献1)

注8) 復元図は壁の出っ張りがなく、かつaタイプの敷居が確認されたホレアにおける開口を復元したものであり、詳細を示すために右側の壁を省略している。また、リックマンの論文において木の棒を南京錠で固定するという記述があったが、具体的にどのように固定されているかまでは特定できなかったため、想定される南京錠による固定方法の一例を示した。

参考文献

1)Geoffrey Rickman, ROMAN GRANARIES AND STORE BUILDINGS, 1971年

2)M. Taylor Lauritsen, Doors in Domestic Space at Pompeii and Herculaneum: A Preliminary Study, p59-75

3)Russel MEGGS, ROMAN OSTIA, 1960年

4)堀賀貴, ポンペイ住宅の平面形式に関する研究, 1995年

図版

図 1-3, 6, 7 筆者作成

図 4. 参考文献1) p60

図 5. 参考文献1) p56

写真 1-4. 九州大学堀研究室実測データ